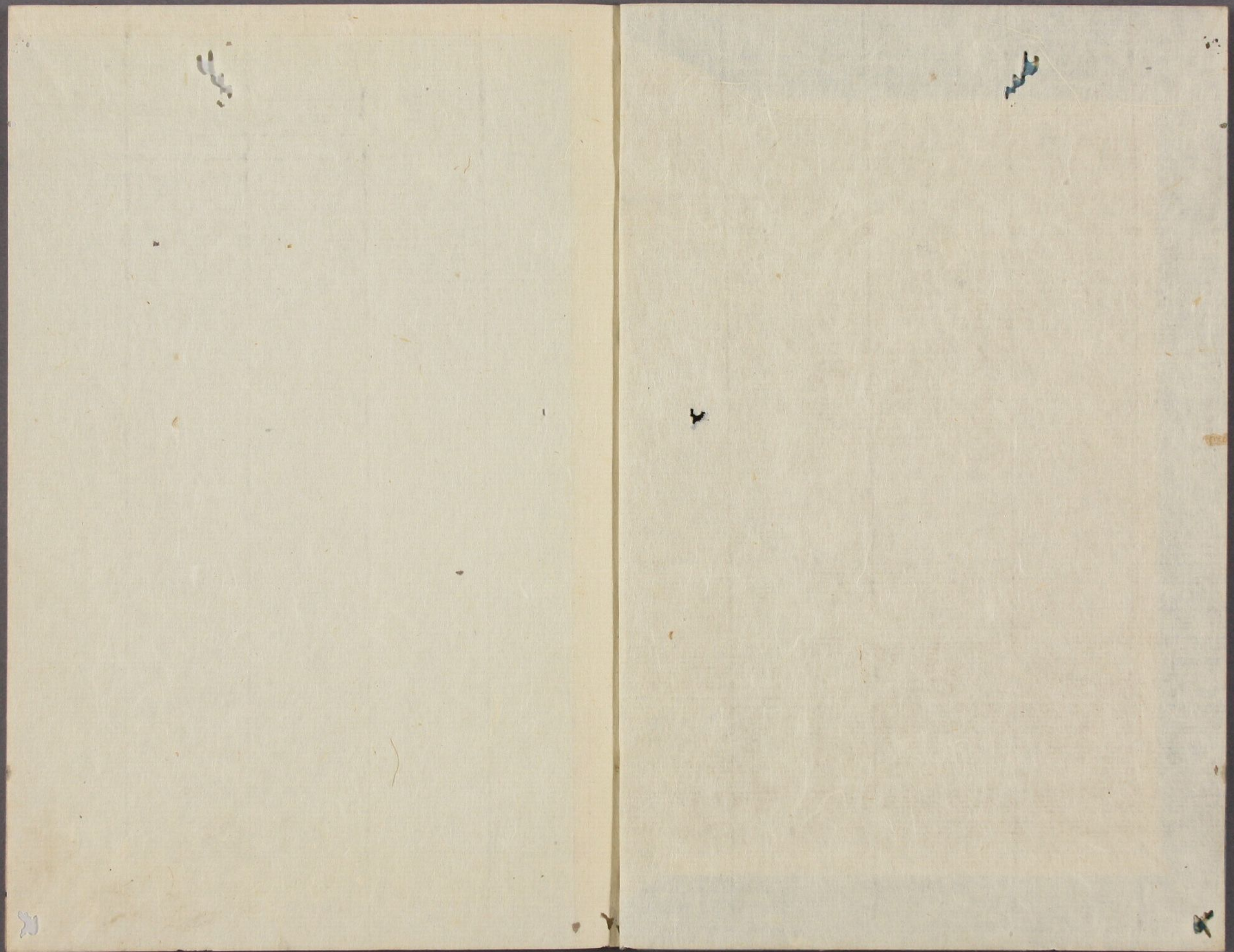


後撰集新抄

春中

二





○地名の布留フルを古きまよひをいしてさき古きとらふ山の橋なれど
極せん時をまことねえ。大和國山辺郡石上イソノカミは布留社のあるによ
りて地名とねえ。それより古きまよひにも雨の降ふるおもいそけのまよ
とひひうらけすふたうさるう。冠禱考カウニなどもそへたり。

花山ハナヤマにて道徳ミチノリをけたるをりふ。

○まね山マネヤマはこゝる遍照ヒンショウのあつまる所なり。古今コキン志シ賀カよ
まのりりける女メどもの花山ハナヤマは入いて、花のむのまよまよなり
てかつりたるまよみてかろりける。僧正ソウジ遍照ヒンショウのまよにそへ
らん人ヒトま花のむまひまつれよ枝エをさるともとあるも。此
所このはあつまるれどなり。續古今集表傷云花山小まかりたり
けりけりをそへたり。道徳ミチノリと法師ホウシと俗人ソコジンとねえ。

素性法師

山守ヤマモリといまゝいそねん高きと乃をの人の橋をりてかざり舞
○此山このの遍照ヒンショウのまよが免まむとがめりまよたよひとがめりまよも。此
山の橋を、又そのまよ免まむとがめりまよたよひとがめりまよも。二句このハ免ま
免まむことねりまよをたよひまよのまよ下したふと免まむ
免まむびさうぬむなれはるること人まよひをり。又また洞ほらも
小葉コエの音をきりて人のまよひをねどとあるなど皆おなじ。
まよの地名このまよあつまる山こののまよなり。まよいさごの
名このなりといふ。宜よろしむる人もあつたり。尾おと山こののまよ
のまよかまよりてかろりて。漢籍カンシヤク戰國策センコクサツ小昔王コセキオウ季歷キリキ葬マツル於お於お楚
山之尾このとある。注このは尾猶オノ末也マツルともを引合ひせて見みる。まよひらね

つゝ○孫云。友がら
みて。伊勢が。たゞ
るき。さうを。おて。
か。こせ。うり。を。を。か。

ふなり。され。尾上。と。さ。ち。山。の。下。に。さ。る。ま。よ。う。炭。の。あ。り。ま。で。を
い。ひ。即。ち。峯。は。り。か。も。り。り。

た。と。ろ。き。出。く。う。様。を。う。て。友。が。ら。の。ほ。う。ま。う。た。う。を。せ。ば。

○伊。勢。一。伊。勢。な。れ。ど。い。せ。が。と。あ。る。あ。ん。ま。に。な。ら。ち。の
み。い。る。ま。例。の。こ。ご。り。又。お。こ。せ。と。り。よ。づ。き。を。ほ。う。り。
と。い。へ。る。も。と。ろ。う。す。べ。て。さ。あ。れ。ま。人。の。方。へ。他。う。り。お。こ
せ。を。ほ。う。ま。う。と。あ。る。と。あ。り。い。と。お。か。う。る。お。ち。他。の。業。は
も。例。と。あ。る。と。お。か。し。ら。う。づ。つ。り。ま。れ。と。ハ。他。へ。や。る。を。こ
そ。い。へ。お。お。い。へ。お。こ。せ。を。い。う。づ。う。さ。は。い。ま。ん。と。つ。う。の
結。よ。記。さ。れ。り。

と。み。人。ま。う。候。

極。ふ。い。ろ。ち。む。と。き。枝。な。れ。ど。か。み。小。足。を。は。な。ぐ。さ。ほ。を。く。小

○抄。云。極。さ。い。づ。き。も。む。と。く。か。も。う。ぬ。枝。な。れ。ど。形。足。を。ど。思。ひ。て。足
を。見。ま。す。人。意。し。く。て。お。か。さ。ら。げ。と。なり。師。云。抄。の。候。ま。一。こ。う。り
ま。し。ら。す。れ。ど。形。あ。り。い。ま。今。か。を。う。て。た。く。う。給。く。る。は。極。を
を。見。ま。す。は。い。く。ま。す。ぐ。れ。る。ま。あ。ひ。枝。つ。き。な。れ。ど。君。と。ひ
と。く。な。す。く。ら。れ。て。お。ま。を。君。が。か。み。と。思。く。ど。か。み。の。その
人。の。か。も。う。に。見。る。物。を。ま。だ。や。が。て。は。枝。小。君。が。こと。う。思。ひ。出。さ。れ
て。か。み。と。思。ま。は。は。く。え。ん。ら。な。ら。ま。さ。ら。げ。し。て。お。お。ひ。が。せ。う。お。う
る。ま。と。と。り。な。り。抄。よ。い。づ。き。も。む。と。く。か。も。う。ぬ。枝。な。れ。ど。い
ぬ。ら。い。く。わ。い。う。づ。げ。取。え。な。ら。ど。思。ひ。て。足。を。見。ま。す。人。意。し。く。て。な。ら。ま
ま。だ。と。り。く。る。ま。と。ら。し。

五

伊勢

又ぬ人のかみびらきをさうらひたすなぞら
 ○抄云我ら形見とてさあさげ家君などふたまたま
 ざとけり何ぞは説のめし物にけりいそかみとり物と
 その人を又ぬきり物ごとくして見るに志ざらんもなむむこと
 なれどは志とこそ身のかみびらきにてをうてあはせたるに
 あらうらむしやうらむさなむふもさきまのサあぬどと
 いへるなりと師翁いされり。

さうらの志をよむ。
 ぬみ人

ふく風をなすし山の花のどけきとるちとれとど
 ○契師法師云万葉集十卷吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀬夜之不

深カ^{カス}ル^カ所^トを^ヲ拾^ヒ遺^ス意^ニよ^リ并^ニの^向な^らし^のを^ウけ^とい^へり^な
 こゝと^ナざ^らか^ニあ^らる^をほ^の人^ナら^しと^写な^せる^なら^し是
 小^うり^てあ^らふ^小今^のあ^も風^をれ^吹こ^しと^いふ^山の^名れ^ま
 ち^らし^とあ^らふ^ゆ也^よの^どう^ふる^とい^ふる^なら^し源^義家
 朝^臣の^吹風^をな^この^雲と^思へ^ども^され^らふ^同ト^から^べ
 し^然る^小これ^も又^なら^しと^うつ^あや^まれ^らう^らの^雲も^大
 和^小あ^れど^なら^しの^山も^あら^まき^を風^をな^らし^とい^ふら^しん^らが
 た^き小^や又^万葉^集七^卷に^てせ^こを^あら^しせ^山と^いふ^らら^し大^和言^布
 郡^巨勢^山なり^弟三^巻に^て波^のさ^せら^しつ^けら^しも^同言^な
 不^二磯^越道^とあ^られ^ばあ^せ山^をな^こせ^の山^とつ^けて^いへ^るが
 ね^どし^とい^ふと^しら^しま^いめ^ては^説の^めく^なら^しら^しの^山

ち。八雲侍抄等にも見たり。

茶栽は竹の中にさくらをまきわたると見えて

坂上是則

桜茶をよく見てんくま中の一よ乃よのまのあまかどりちをもちこそすれ

○一首のまめくくわたり。

歌あはれ

とみ人あはれ文

さくらをぬりよとなくまくればなごりなげきのまぐりのみま

○まよなれど桜のまごりゆにまよく見て桜のまのまよなりとるか

ひあることねまどまごりゆうき相思いの所まで桜の花のやうふ

むやぐんぬれくたぐりまのなげきまゆれまごりゆわ何とて

いやふ相思いのまごりゆまごりゆ。 なげきとりよよ本をの

秘するまつに多し。心下のまごりふも。何多くあるなり。本はまげると。まのまごりまど。

かくよまごりなり。けあ伊勢系系なり。ま相思ひゆるふと。何書何

と。

貞観の時時ゆまごりまごりまつりけるふ。

○貞観らヂヤウクワンとよむ。清和天皇の時時の。年号なり。

弓のまごり。抄は融公近衛ゆまごりなり。こゝろふやといへる。

まごりことねまごり。

河原左大臣

きく桜茶のふあまいざぬまんのごまふさくふ風のおぬま

○花の下に弓を射なぐり。まにいざぬまんなさやうにぬまなど風の吹

てむまぬりとも。香の衣ふまごりまごりまごり。

と香共よといひしにて。信よ香なる免よといふをなう。万葉十七小。
我石の志橋をむご免小玉をど阿がぬくまらばくし。下考。
根ご免よ風のかきもこそねん。又枕草紙よむらろご免よ辨ご免
などいふもよしなり。

家よりききまよまる時。若裁の橋の志よひつけ侍々。

○抄云。讃岐任のころよや。左近の時時など好るべし。

菅原右大臣

さうらふ家ゆゑを志せぬ物あらばふまろん。風よことつらせよ
○拾遺^上。なぐさむ侍々時。家の橋を志侍は。贈右政大臣。若^下ちよ
のばよかひかこせよ。梅の志あはれなり。とて。喜をわける。好る阿
ふよけり。同。

春のころを。

いせ

あをやぎ乃系より^{かけ}入てわらまら。城いづ^はせの山乃^いきりまら

○柳の系をよりつ^た延^べ川^をら。雪の忌料。機を織とと見也。玉機をば。
何^い所の山よ^いある。雪^を来て見る。ことごと好る。

春のちるを見て。

凡河内躬恒

あひ思をぞうつ^お流^しを^を見る。その浅花小まら。色ぬなが免まら。うね
○我々春の上を。あはつけ。風よつけ。やまら。もなう。思よを。春はまら。
影がかく思よりとも思を。人のまら。おある。を。かく我けけ思ひと
いふ。そのなり。物ら。ば。ま。や。かく思よ。べきまら。も。なき。を。や。まら。
まら。春よ。あ。く。ま。せ。ぬ。心^こ若^わを。する。ま。ら。好。と。い。ひ。なり。お。思。よ。ら。
け。方。の。思。よ。ぬ。か。な。ま。ら。よ。り。も。思。よ。ま。ら。ぬ。お。思。え。ぬ。と。い。ひ。を。

行思ひの事にならぬなり。万葉巻十小。お思をであらうんこゆゑ玉の
紙の巻紙巻目を思ひくさく。など所も回下。

帰宿をききて。

かこ人あつて

うふかりき路まよどふなり。まねとあふきとけこの免はる。の勢

○中あたる。そよ。扇の勢。おから。まねとあふきとけこの免はる。の勢

ひよせりなり。金葉。夏。利。と。ぎれ。まねとあふきとけこの免はる。の勢

だよせよ。み月。雨。の。空。など。似。し。い。ひ。ぎ。り。なり。お。不。新。古。今。あ。ど。に

多。この免。春。風。八。本。の。芽。の。出。る。を。芽。は。る。と。も。い。へ。ど。本。の。芽。は。る

ふ。この。春。風。と。い。ふ。さ。なり。され。ど。あ。は。さ。ま。て。ら。た。る。春。風。と。い

のみ。ふ。て。本。芽。と。い。ふ。ま。も。い。ひ。ひ。けん。料。子。枕。詞。の。や。う。み。お

きた。なり。古今。又。此。集。よ。この。免。春。雨。と。も。あり。回。下。は。く。ひ。ぎ。り。雨。那

己。

米雀院のさうらの。おと。ろ。き。り。と。延光朝臣のかうり。侍。れ。ど。
る。る。や。う。も。何。う。ま。し。の。紙。か。ど。若。と。思。ひ。出。く。

大将 涉息 雨

さ。起。さ。う。げ。家。り。那。つ。げ。そ。梅。花。人。げ。く。に。や。ら。ま。ん。と。思。ひ。

○は。涉。息。雨。の。延。喜。の。女。侍。なり。今。は。延。喜。帝。崩。御。侍。の。後。の。侍。事。と。す。也。米

雀。院。八。累。代。の。後。院。な。ま。ば。帝。も。ね。さ。勢。あ。ひ。て。於。此。院。小。大。内。一

ま。し。ほ。ど。な。ら。ば。家。も。を。梅。を。ん。ど。き。り。那。ま。ば。か。く。人。侍。な。ど。に

ま。ん。と。思。ひ。も。う。け。さ。ら。し。物。と。昔。の。思。ひ。出。さ。し。く。い。く。照。

を。れ。ど。を。梅。の。笑。う。り。と。も。さ。う。げ。と。も。一。向。ま。さ。や。う。な。る。ゆ。ゑ。な。ど

を。我。ま。い。き。か。ま。る。り。那。の。世。と。なり。され。さ。か。ぎ。ら。俗。ら。み。い。ま。ど。サ。カ。ウ。ガ。サ。ク

やまひのついでちぶらふ。女はほろろけ。

なげき入る妻を去るこそわびしき事ゆとら人よ是れぬ物なり
○諸本こそ妻を去りて芽の出づき事ぬ人のかげきといふハ実
の本は阿のバ。妻とても去る事ハなき事づなるに人の目よかく
そゆといひぬものぬのけりや。まう我がん中のなげきも。又諸本の
ぬくもゆの事なびい—はふとならなれどなげきのことゆハ目に
こくぬ物なむバ。かく思ひもゆも。ぬのハあつとといふ事とふ
くえさるなり。 本のもゆとハ。芽の出る事。なげきもゆとハ。中
小思ひこがきて。猶いこく養ゆの事ぬと。詞の同ドけきなりひよ
せくさて本の妻を去るといふ事。ゆとらふハ。同ドゆとたがひ
ふらふなり。

妻のふは思ひのまきなくてせいでたなげきめ後とやす
むといふ。古来のんぢ人を女よひつは—なりけき。

○こ小あゝうゝうゝて。妻のいのいハ。上下向のるよ。いの
なと阿のハ。六帖のあひの歌よとら。

とをいさるなげきも妻のさぐぬきバ。たうにこそ阿それともえさ
○妻はなべて本芽の出る時なむ。なげきのことゆとのいさるも。妻の
なうひぞと思ふゆあま。一とやうも阿それとハ思ふ。格別カクベツなる事
とい思ひ侍るじとなり。 さがといふ詞も。なうひとせ。あうりま
ぬど。そ阿なま。さかして。袂まきまなり。神代紀も。神性と。かゝさかと
よきたる。所ありて。整神法師も。さうく。是彼より出づ。まうり。総れど
も。神代紀も。性字とサガとよえらる。かなふべ。それども。サガの詞

又他老と奉
 る所より名
 なりまがび
 亦も上の友
 原野手折居
 のおときこ
 えくはとま
 きしけしと
 けしの子
 思ふなり。

今の際。二条通の西なり。

山里よりちりねま〜ちぎ梅もよわみさうりもあつとさうま〜

○ちりでありつばこ〜かく花の盛とも思ふあつとさうま〜なり。

浄の〜
 ○延喜帝なり。

小むはけう〜けう。

後京朝忠朝臣

時〜も何色花のさかりはけう〜けい色ど思ふぬ山お入やちねま〜

○此贈答二首ともふか〜うけい〜の誤などあるにやつ〜ねま〜

小むはけう〜けい〜

後京朝忠朝臣

時〜も何色花のさかりはけう〜けい色ど思ふぬ山お入やちねま〜

○此贈答二首ともふか〜うけい〜の誤などあるにやつ〜ねま〜

小むはけう〜けい〜

後京朝忠朝臣

山凡の花乃多かどよめりさきふぶたを喜の表ぞほごなりを
 ○かどよめ今の人のかどよめとりや同ドくぬまみていざおひ
 りぬまむぬまむとりよよかへてよえとと縣飛大人いもねさう
 ほご刑具の桎梏アチセカセの桎の義なり古今下世のうきめりぬ山
 海へんよとよ人こそほごなりをれとあるあど同ド
 一首のまハ風が花の多をぬすいざおひてぬんとす。山の麓に
 ちまひ免さるあが桎ホセとなりてんぬすにちまひ出がさか
 りよとれり

歌しづば

よみ人あつて

喜乃世りぬまにさるんふもねあささく花をくおひ
 ○喜乃のちちうといまん料ま。うにさるち。向ムカくなり果ミテさるなり。

ありまののふまハいとゆ。早ヨシのぬのほ用さるまきまな
 同ドく。うりまのちあさね。うりまのち。向ムカくなり果ミテさるなり。

とするま。惜ウツクく思ふ。我を思ふ。花のちちうんとさる
 も同類まなんとするま。惜ウツクく思ふ。初句。喜乃のち
 かねどやさうかきとば惜ウツクく思ふ。初句。喜乃のち
 ちハ。思ふ。さるといまん料ま。うにさるち。向ムカくなり果ミテさるなり。

あさささくハ。思ふ。さるといまん料ま。うにさるち。向ムカくなり果ミテさるなり。

ち何のあやのち。思ふ。さるといまん料ま。うにさるち。向ムカくなり果ミテさるなり。

ち。思ふ。さるといまん料ま。うにさるち。向ムカくなり果ミテさるなり。

アツタラおぢやなど。思ふ。さるといまん料ま。うにさるち。向ムカくなり果ミテさるなり。

の古き訓など。思ふ。さるといまん料ま。うにさるち。向ムカくなり果ミテさるなり。

歌あしき

福もぬを志ひて我ぬる妻の秋の憂をうつになまきりもづれ
 ○三向まで志ざりくおぼしきことほくくくするてきてお思
 ひの志げさよしも移もぬきをかく先なるなごり。一首のま
 をお思ひの志げきてお覚ゆるつのもる若しくたくうぐれ
 ださるううーなるハいゝ志ざりげほふなきゆりーとゆるべし
 又思ふは契仲法師の妻の秋の憂ハく何よりよ何まきり先
 へは併ふ福もぬを志ひてるがぬまき。又一鳥可どろまぬりへ
 も人を足門の志まきりかきなん妻のよ秋憂新古今玉の秋の憂
 のあきりくつくとも足りばりふあつたのらん。又「枕ざら
 ち〜」といもど足り師は君くるぬよ妻のよ秋憂又「妻の秋の

憂のうき橋とくえりて岸にまきり横雲の雪續ふ哉^意あかやと
 おまひくしたの先づち中々妻の憂を足りまき。貫之集福もぬを
 志ひて痛て見る妻の秋の憂はのぎりハあまひなりたり。伊勢集妻
 の秋の憂は所憂りと足りつまど思ひ給よ一人ぞすくく。兼盛集
 思ひつ秋つまど思ひ給よ秋の憂ハく思ふむな〜かきまな
 六帖集又「妻の秋の憂ハく思ふむな〜かきまな〜
 及び〜西行法師山家集」〜くねぬ妻と〜とら思ひ給よまき
 一〜名〜て〜の秋は初集まき〜してあ〜〜といふね〜。げよ捨
 送^意こいよ〜をい〜く〜の〜思ふよまき〜の憂をまき〜
 だやま本^{サロ}まき。妻のよの憂は所をこき〜〜〜。思〜まき人よあ
 がま〜〜さねどなやあ〜。又書紀崇神の傳巻^{四十}八^八年よ豊城命と

○いづつ小をまゝおてら。使てやいふやいづまにちあふげ。今昇進あ
ふべ。今見ば。古まものよし。て。たす。て。ら。ま。の。ま。り。好。る。ま。な。り。と。て。
ま。し。く。ま。び。ま。し。こ。と。好。の。見。ま。な。り。 喜。の。い。ふ。り。ぬ。や。む。づ。ま。か
どいもん料なり。

後撰和歌集卷第二新抄

